



KFC News

Kobe Foreigners Friendship Center NEWS LETTER

2022. 3. 17

No. 167

法人本部 〒653-0038 神戸市長田区若松町 4-4-10 アスタクエスタ北棟 502
TEL : 078-612-2402 FAX : 078-612-3052 E-mail kfc@social-b.net
デイサービスセンター ハナの会 TEL / FAX : 078-612-2408
グループホーム・小規模多機能型居宅介護ハナ TEL : 078-798-5475・4 FAX : 078-798-5476
ハナ介護サービス TEL : (居宅) 078-646-8671 (訪問) 078-646-8670 FAX : 078-612-3052
ふたば国際プラザ TEL : 078-747-0280 FAX : 078-747-0290

Kobe Foreigners Friendship Center NEWS LETTER

笹川平和財団助成事業 オンラインセミナー

韓国における第三国定住難民(再定着難民)の受け入れ概況と インドシナ難民受け入れ 40 年を振り返る

2月23日(水・祝)に、表題のオンラインセミナーを開催しました。

第1部は、国際難民支援団体・避難処のイ・ホテク代表より、「韓国における再定着難民(第三国定住難民)の受け入れ～その成果と課題～」というテーマで、2015～2020年度まで実施されていた第三国定住難民支援について、受け入れ人数や支援内容について、詳細をお話いただきました。

また2018年11月に、2015～2017年までの3年間に入国した第一次モデル事業難民を対象にして、定着実態(大人38名、児童20名)を社団法人避難処が調査された結果、難民たちの意志や能力に関する主観的指標(RISE -Refugee Integration Survey and Evaluation)調査(就業・財政、教育訓練、児童教育、健康、住居、同族間結束、定着地社会連携、言語と文化、安全、参加の10の主観的指標)を、アメリカのDenver及びカナダのLangleyの第三国定住難民制度指標と比較したところ、比較的良い定着指標の結果が現れており、最も重要な指標となる就業、教育、言語領域において、先述の2地域より定着指標の結果が優れていたとの報告がありました。

第2部は、「インドシナ難民受け入れ40年を振り返る～当事者が感じる日本の難民受け入れ政策の成果と課題～」というテーマのシンポジウムを行いました。

パネリストは、NPO法人外国人支援ネットワーク すたんどばいみー代表のチャン・ソワン・ナリット氏、賢明女子学院中学校・高等学校教員の平川孝美氏、KFCス

タッフのハ・ティ・タン・ガで、コーディネーターは、難民事業本部関西支部支部長代行の中尾秀一氏にお願いしました。

3人のパネリストの方からは、インドシナ難民受け入れから時間が経過した現在も残る奨学金などの教育課題について、中心にお話をいただきました。

参加者の方からは、第一部に関して下記のご感想をいただきました。

・(1)他国との現状の比較、(2)歴史を振り返るという二つの軸で捉えることで深く考えることができた。

・定住後の支援期間について、長い方が良いのか、短い方が良いのかといった話もありましたが、言語の壁を考えると、大人も含めた学習支援と、当事者間でのコミュニティ形成を意識した定住受け入れを長期的に考えていくことは重要だと感じました。

・興味深かったのは、難民への支援の期間への考え方です。アメリカの三カ月というのはともかく、長ければいいというよりは、それがなくても社会保障やサポート体制があるのが大事だということですね。日本ではやはり公的支援が少なく、恩恵的になってしまうのが、どの人にとっても、役に立ってないのがコロナでわかりました。

第2部に関しては、下記のご感想をいただきました。

・特に第2部の当事者からのお話は、それぞれの思いが感じられて、みなさんが必死で頑張ってきたことに胸がいっぱいになりました。

・私たちはいつまで難民なんだろうというがさんの言葉が、印象に残りました。しかし、国籍を日本国籍に変えた

だけで予想もしない不利益が発生するとなると、その部分は改定しなければと思いました。ただ、やはりある程度、期間を区切ることの大切さを感じました。

・高齢者となった難民の方々が心配なく人生を全うできること、その子ども世代がゆとりをもって介護できることの大切さを改めて感じ、共助という形での支援が引き継がれていくことが必要なのだと思いました。

韓国の支援内容や日本では実施されていない主観的指標調査結果については、非常に参考になるもの

が多くありました。この2年間に実施した、日本の第三国定住ミャンマー難民、インドシナ難民の方からの非常に貴重な寄稿文についてもまとめ、これから報告書にしていく予定です。

今回調査事業委託を頂いた笹川平和財団様のご協力も得ながら、制度設計をしている方々に、本報告書の当事者の声や他国の事例を届けることで、少しでも「当事者目線」の難民受け入れ制度に改善してもらえたらと考えています。
(志岐 良子)

Kobe Foreigners Friendship Center NEWS LETTER

日本語プロジェクト

◆ボランティアワークショップ

1月16日(日)と23日(日)、KFC日本語ボランティアワークショップを行いました。このワークショップでは、CEFR※をベースに①ワークショップを通して語学コミュニケーション能力の標準化を行い、学習者を成功に誘うための考え方、ノウハウを一緒に考え、②語学習得において、学習者自ら「わかった!」から「できた!!」へと導く「行動中心アプローチ」の考えを理解し、「考える支援者」を目指しました。ファシリテーターは支援者の坪田潤さんをお願いし、参加者は16日が7名、23日が9名でした。

従来、日本語能力のレベルとして日本語能力試験(JLPT)が使われてきました。N5~N1のレベルがあり、基本的な日本語である程度理解することができるN5レベルが一番やさしく、幅広い場面で使われる日本語を理解することができるN1が一番難しいレベルです。しかし最近ではCEFRも、日本語の能力の尺度として広く知られるようになりました。

今回は、CEFRをどう活かしていくかをグループ討論で深めました。例えばの話です。新しく引越してきた時、ゴミをどのように分別し、いつ捨てるのかわからないと、家の中はゴミの山になってしまいます。困りますね。ゴミの捨て方がわかって、実際に捨てられるようになること、これが重要です。日本語学習支援も、実生活や行動で活かせる「できた」を増やすことを頭の中においておきたいものです。これが「考える支援者」です。

KFCの日本語学習支援は、これという定型のものが

ありません。ベテランの支援者の方も始めたばかりの方も、相手と向き合って学習希望や学習目標を聞き取り、サポートをしていきます。難しいでしょうか?だからこそ、やりがいのある、楽しい活動なのかもしれません。一緒に取り組んでいきましょう。

1月26日(水)、27日(木)に「日本語文法勉強会」を行いました。外国語として日本語を学習する人は「日本語文法」という日本の小中学校で習う「国語文法」とは違う文法名称を使います。語学学習では文法知識の習得は上達するのに欠かせません。日本語学習支援をする際の基本的なことから勉強するのはどうかと、この会を企画しました。参加者は26日3名、27日1名でした。26日はゼロ初級の人との一回目の学習を想定し、準備物やどうやって進めていくのがいいか一緒に考えました。アクティブラーニングの実践です。27日はオンラインで希望に合わせ進めました。

日進月歩、日本語教育も新しいやり方、新しいリソースがぞくぞくと登場しています。温故知新、以前から変わらない基本的なこと、より良く変わっていること、どちらも大切にしていきたいと思えます。
(奥 優伽子)

※CEFRとは:ヨーロッパ言語共通参照枠の略称。2001年にヨーロッパの言語教育・学習・評価の場で共有される枠組みとして発表され、世界でも広く外国語教育や評価の場で利用されている。

(JF日本語教育スタンダードHPより抜粋)

多文化子ども共育センター

◆学習支援活動に参加して

今回私たち甲南女子大学2年生は行動演習という授業の一環でKFCの学習支援活動に2021年7月から2022年1月の間、参加させていただきました。行動演習のこのゼミに所属している学生は授業で英語、韓国語、中国語、インドネシア語を中心に学んでおり、語学だけでなく文化や歴史、社会などさまざまな分野を勉強しています。

私が行動演習でこのゼミを選んだ一番の理由は、もともと外国に興味があったことと、高校の恩師の影響で教育にも興味があったからということです。外国と教育の二つが合わさっているこの外国にルーツを持つ子どもに勉強を教えるというゼミで、多文化について、また外国ルーツの子どもが抱えている問題について深く学ぶことができるととても嬉しいです。

今回、KFCでの勉強を教える活動に参加させていただいて一番感じたことは、思っていたより多様な子どもたちばかりであったということです。来日間もない子どもや日本生まれの子ども、日本と外国を行き来している子どもなど、状況だけでなく日本語を話せる程度も子どもによってさまざまとても驚きました。それに伴って勉強内容や教え方、対応の仕方など皆同じ方法ではダメなのだと感じました。当たり前のことですが、性格も考え方も違う子どもたちばかりなのでお喋りから勉強への切り替えの仕方、勉強の声掛けの有無、分かりやすい日本語を使うなどどうしたらよいか分からないことだらけでした。しかし、教えている子どもたちが勉強を理解した時に見せる嬉しそうな顔を見ると私達ももっと教えるのが上手になりたい、ほんの少しにしかならないかもしれないけど子どもたちの力になりたいと思いました。この活動に参加させていただいたことで

外国にルーツを持つ子どもたちが楽しく勉強ができるように、また勉強だけでなく学校生活も不安がなく過ごせるように私たちができることをこれからもやり続けたいです。

2021年12月22日、ふたば国際プラザにて甲南女子大学の学生がKFCで勉強している子どもたちと一緒に楽しみ会をしました。楽しみ会ではジェスチャーゲーム、箱の中身はなんだろう、ビンゴと3つのゲームを行いました。ジェスチャーゲームでは、カードに書かれたお題を身体を使って見ている人に伝えるというルールで行ったのですが、お題を文字で書いてしまいイラストを使ってお題を出したらよかったなと思ったことや、箱の中身はなんだろうで箱に入っているものの名前が日本語では分からないけど中国語では分かるということもありました。それらのことはKFCの活動で勉強を教えているだけでは分からなかったことだったのでその経験を通じてより考えを広げることができました。

KFCの教室の中だけでなく外でこのような交流の場を作らせていただき、私たち学生も良い経験になり、これからの学生生活に新しい刺激として記憶されたと思います。短い期間ではありましたが、たくさんの人と出会ってたくさんの経験をさせていただきました。コロナによる不安な日々がまだまだ続きますが、皆さまどうぞお体にお気をつけてお過ごしください。ありがとうございました。

(甲南女子大学国際学部

多文化コミュニケーション学科2年 岡田 茉莉)

◆外国ルーツの子どもの子育てで知ってほしいこと

「外国ルーツの子どもの子育てで知ってほしいこと～子どもがそれぞれの明るい未来をえがけるように・・・～」を作成しました。

外国ルーツの子どもが様々な環境要因により、本来持っている力を発揮できずに、発達障害と診断されてしまうというケースが増えています。

そういったことを少しでも解消したいという思いから、手に取っていただきやすいB6サイズ、中国語、ベトナム

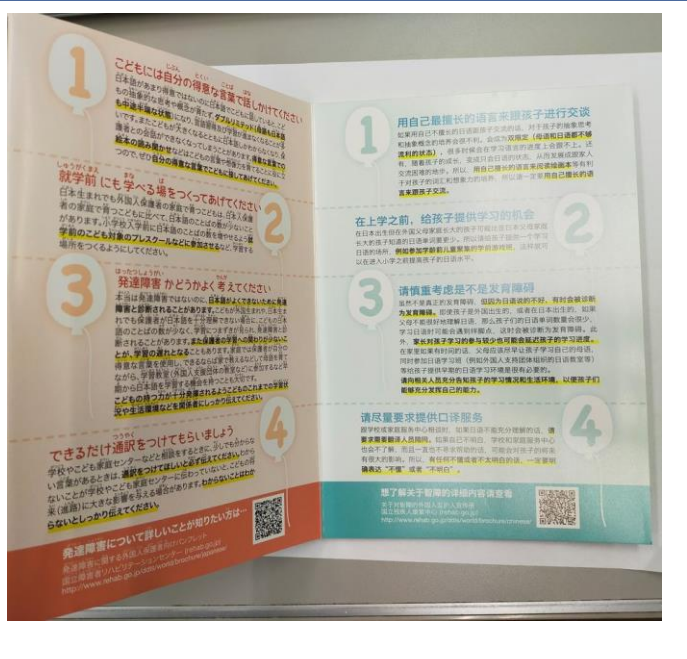
<https://www.social-b.net/kfc/katudou/kosodate.html>



語、フィリピン語、ポルトガル語、スペイン語、英語、日本語の7言語でパンフレットを作成しました。広げるとB3サイズになり、写真(左)のようにポスターとして貼っていただくことができます。

これから、関係する行政機関や、外国人支援団体、保育園、小学校に配布していく予定です。

下記、ホームページでダウンロードなどもできますので、ぜひ関係する方にお知らせください。



◆私の進路選択

3月3日(木)の学習時間中に、現在、大学のプログラムで支援者として参加してくれている関西国際大学の3人の男子学生に、自分の進路・職業選択についてお話いただきました。

3人の方はみなさん教育学部に所属し、小学校教員を目指しているとのことでしたが、小学生の時の熱心な担任の先生との出会いや、年少者の面倒を見るのが好きだった経験などから小学校教員を目指すようになったとのことでした。

KFC で学習していた子どもの中からも、既に学校教員になり、同じような背景の子どものロールモデルとなり、子どもたちのよい理解者となっている人もいます。

しかしまだ、日本人と同じ教員採用試験に通っても、外国籍だと、公立の小中高で管理職への道が開ける「教諭」になれないという問題があり、スイス・ジュネーブの国連人種差別撤廃委員会から、国籍を理由に昇任の機会を奪わないよう日本政府は勧告されています。学校現場で増加し続けている、外国ルーツの子どもたちのためにも早急に改善してもらいたい人権問題の一つです。

(志岐 良子)

デイサービスセンターハナの会

◆鬼は外！

今年もコロナ禍の節分に「鬼は外！」と厄払いをしました。まだまだ拡大するオミクロン株の感染不安から利用を控える方も増えていますが、マスク越しの笑い声が響きます。体を動かす日替わりレクリエーションの時間です。

先日の旗揚げ体操の日には「赤上げないで白上げて・・・」と号令役のスタッフの指示を聞き洩らさないように集中。間違えても笑い声でリラックス。号令に慣れてきた頃に号令役を利用者様にお願いすると「え～～」と消極的。少しの沈黙のあと、「よっしゃ！わしがやるわ」とAさんが立ち上がってくれました。Aさんの楽し気に号令を出される姿にどの方も号令役を引き受けてくれ、横振りや腕を回すなどのアレンジもあり、体も気持ちもほぐれます。かつての手旗信号の体験を始める方もあり賑やかです。ベトナムデイのこの日はジェスチャーでの交流。ベトナム以外の方との交流がほとんどないBさんも多くの目が集まってもにこにこ顔で堂々とジェスチャーで指示を出してくれました。

利用者様全員参加の午後のレクリエーションでは、利用者様のいろんな表情に出会えます。頑張って競い合い、その姿を応援したり、労いの言葉をかけたりと、アットホームなハナの会です。「家にいてもひとりやかな～」「ここへ来たら皆に会えてしゃべれるし、笑えるわ」こんな利用者様の声にいつでもハナの会は、安心して通える場所でありたいと思います。

(後藤 なる美)

令和3年度 外国人への医療支援に関するオンラインセミナー

多文化共生社会の先にある 異文化間介護の現実

現在、新潟県でも在住外国人の定住化が進んでいることから、今後、外国籍住民の高齢化問題が深刻化してきます。言語や習慣の違い、介護保険制度の理解が困難なことなど、多文化共生社会の陰に隠れ多くの課題を抱える外国人高齢者をどう支えていくのか、関係者が協働し、日本人も外国人も安心して老後を暮らせる地域社会を作っていくためにはどうしたらよいか、先進地の事例などを通して考えます。

日時 **3/26(土)13:30～16:30**

定員 **30人(参加費無料)**
医療・介護関係者、企業関係者、行政・国際交流協会職員、社会福祉関係職員、外国人支援団体関係者、通訳ボランティア、外国人医療に関心のある方等、どなたでも参加できます。

方法 **オンライン**
(ZOOM ミーティング)
※申込方法は裏面をご覧ください。



内容

1. 挨拶: 新潟医療通訳センター 代表 坂口 淳 氏(新潟県立大学教授)
2. 講演: 「外国人高齢者は今 多文化共生社会の先にある現実」
外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト 代表 王榮(木下 貴雄) 氏
3. 事例報告: NPO 法人神戸定住外国人支援センター(KFC) デイサービスセンター ハナの会
管理者・生活相談員(社会福祉士) 鄭秀珠 氏
4. 意見交換

◆登壇者プロフィール◆

- 王榮(木下 貴雄)氏 / 「外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト」代表、「あいち多文化ソーシャルワーカーの会」代表
中国帰国者公選「平和の橋」監理委員会副委員長、愛知県立大学非常勤講師
中国からの引揚者で認知症が進み「母語がえり」になる父の介護をする中で、言葉が通じない介護の大変さを痛感し、2014年に「外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト」を発足。専門知識を持った中国語介護通訳の養成とボランティア派遣、異なる文化としての「介護・終活」に取り組む。
- デイサービスセンター ハナの会
地域に暮らす多様な文化背景を持つ人々が「ともに生きる」ことができる社会に向け活動する民間団体「NPO 法人神戸定住外国人支援センター(KFC)」が 2005 年に開設。ハンガール、中国語、英語、ベトナム語、スペイン語ができる多様なルーツを持つスタッフにより構成。食事やレクリエーションにおいても言葉や文化に配慮したサポートを行い、在日コリアンやベトナム人、中国残留邦人帰国者など異文化をもつ人にもやさずらさるるサービスを行う。

主催: いがた医療通訳委員会(新潟医療通訳センター)/公益財団法人新潟県国際交流協会

スタッフが事例報告をさせていただきます！

K F C 帰国者新長田交流会

◆セミナー「中国帰国者を取り巻く経緯と現状」

1月30日に、地域の多様性の歴史を学び理解を深めるセミナー「第三回 中国帰国者を取り巻く経緯と現状」を行いました。このセミナーは「多文化共生」やボランティアに関心がある方に向けて、多様な文化的背景を持つ人々について理解を深められるようにと企画しました。第一回は7月に「長田と在日コリアンの歴史」、第二回は9月に「ベトナム人と長田の歴史と今」と題して行ってきました。三回目となった今回のセミナーでは戦前の中国東北部の社会背景から終戦、戦後、帰国、現在に至るまで、中国帰国者を取り巻く歴史的経緯をコスモスの会尼崎日本語教室代表の宗景正様にご講演頂きました。今回このような機会を設けたのは、中国帰国者について、より多くの方に目を向けて欲しいと考えたからです。

中国帰国者(日中国交回復後に壮年期を過ぎて日本への帰国を果たした中国残留孤児・婦人とその家族)は日本語習得や就労面、差別など様々な困難を経験し、現在は高齢化による医療や介護の課題にも直面しています。しかし終戦から年月が経ち戦争の記憶が薄れ、中国帰国者は日本社会でだんだん注目されなくなっている気がしています。権利の保障、多様性を尊重する視点を育む上で歴史的経緯への理解は不可欠だと思いますが、現代では学習機会が限られているような気がしています。現代では「多文化共生」という言葉が市民権を得たかのように歩いていますが、その言葉を口にする時、帰国者のことを考えている人は社会でどのくらいいるのでしょうか。「難民支援」という言葉であれば最近は多くの方が関心を持ちますが、中国東北部で「難民」となった過去をもつ中国残留孤児・婦人についてはどうでしょうか。KFCでは毎週火曜日の帰国者交流会を通して居場所づくりや文化活動、日本語学習などの点で帰国者

支援を行ってきました。遠方にお住まいでも、ご高齢でも、電車やバスを乗り継いでほるぼるふたば国際プラザにやって来られて熱心に日本語を学び楽しく話し、太極拳や広場踊りをされているのを見ると、一個人として、居場所の大切さや文化の継承、こうして皆で今過ごしている時間が貴重であることを感想として抱きます。課題はいろいろとありますが、参加者お一人おひとりの話をもっとよく聞いて、必要な支援をしたいと思うと同時に、学生をはじめ地域のいろいろな人に交流会に来てみて何かを感じて欲しいなという気持ちになります。

ところで、2月24日から一週間、新長田大橋の地下道でランタンを150個ほど飾りました。ランタンはふたば国際プラザの利用者やボランティアの方々によって絵付けされたものですが、帰国者交流会の参加者が絵付けをして下さったものもたくさんあります。特に一世配偶者の張雨均さんは、独自の努力の末に習得された切り絵の技術を活かし、たくさんの切り絵をランタンの模様として提供して下さいました。ランタン以外の切り絵作品も、展示することを今回快諾して下さいました。事前準備の時に張さんの切り絵作品を一つひとつ糊付けし直している時に、改めて作品の価値と発信の必要性を感じました。これから、地域社会や若い世代への発信というものにもっと力を入れて、「多文化共生」に必要な感性を育めるような事業展開を行っていきたく、そのように考えました。

(大石 貴之)

コロナ禍で困窮する外国ルーツの家庭への物資提供活動

2021年の8月から12月にかけて神戸市在住の外国にルーツを持つ子どもがいる世帯を対象として、赤い羽根助成金の助成を受けて物資支援活動を行いました。

私は、各世帯との連絡調整を主に担当しました。東灘区、灘区、中央区、兵庫区、長田区、須磨区、北区の有馬などの7つの区域の20世帯を対象に5ヶ月間の物資支援をしました。これらの20世帯は12ヶ国から日本に来た人々で、様々な領域で活躍している学生、難民、会社員、アルバイトなどの人々でした。

事業の具体的な流れとしては、各世帯が希望する支援物資（主に食料品）をスーパーで購入し、車で配布するという流れで実施しました。主な支援物資を具体的に言うと、米、パン、乾麺、牛乳、たまご、幼児が使うおもちゃや学校で使う道具などで、支援世帯の玄関まで届けました。また、コロナ禍で自国特有の食物を手に入れるのが難しいことも考え、そのような物資提供も行いました。例えばベトナムの支援世帯に対しては、神戸市長田区にあるベトナム食材店でフォーを買って届けました。

新型コロナウイルスの広がりにより、多くの人々がアルバイトや仕事がなくなり、生活は大変な状況に陥ったと言えます。主に飲食店の店員、旅行会社の会社員など、サービス業の人はコロナで直接大きな影響を受けました。これらの人々の大部分がコロナ禍で仕事が減らされたり、なくなったりして、最低限の生活維持費さえも得られなくなったと話していました。一方で、コロナの影響だけではなく、元々生活面で苦しかったという世帯もありました。日本語の問題もあり、就職もできず、アルバイトを探し難い状況でした。

今回の事業は5ヶ月間というの短期間でしたが、コロナ禍中でこれらの20世帯に対して支援を行った

ことは、彼らにとっては非常に助かったとスタッフとして感じました。なぜかという、支援物資を届ける時の笑顔やいつもの「ありがとう」から感謝の気持ちを感じたからです。

まだ支援が必要な世帯に対しては、12月に最後に食べ物を届ける時に神戸市の子育て世帯への食料支援「子育て世帯への食を通じたつながり支援」を紹介し、そこから支援を受けられることを簡単に説明しました。

現在、新型コロナウイルス感染症が流行し始めて2年になりました。最近では変異ウイルスが台頭して大幅に流行し、まだまだ先が見えない深刻な状況にあります。こういう新型コロナウイルスやその変異ウイルスの感染拡大に伴い、子育て家庭の生活が厳しい状況に陥る等様々な問題が起こり、子育て環境にも大きな変化が生じています。これが今日の一番大きな社会問題のひとつとなっています。神戸市からは「子育て世帯への食を通じたつながり支援」等が行われ、子どもがいる家庭を支援していますが、その上で外国にルーツを持つ子どもたちがいる世帯への様々な支援も必要だと思われます。例えば、神戸市北区有馬に住んでいるひとり親家庭ですが、新型コロナウイルス感染症の前から母親が持病を持ちながら会社員としてホテルで仕事をしていました。その後コロナが流行り、有馬に観光客が激減し、緊急事態宣言が出されたことと共に仕事を失ったと話していました。そこでしばらくの間、神戸市北区の区役所からの補助金に頼り最低限の生活を維持していたといいます。北区の区役所職員がKFC赤い羽根事業を知り、彼女に紹介したことでKFCの支援に繋がったようです。私たちが月に一回米、牛乳、たまご、乾麺などの支援物資を送ると大変嬉しそうでもいつも感謝していました。

(永良)

ふたば国際プラザの会議室をご活用ください!

ふたば国際プラザでは、語学講座や外国人市民理解のための講座、外国人支援を行う団体の会議など行われる方に無料で会議室をお貸ししております。1Fには、大きいスクリーンも常設しておりますので、ご興味のある方はぜひ一度お問い合わせください。

今後の予定

■ふたば国際プラザ

○地域の多様性の歴史を学び理解を深めるセミナー

第5回「フィリピン人母子の居場所づくり」

講師：Joshua Yogue 氏(マサヤン タハナン スタッフ)

3月20日(日)14:00-15:30

祝25周年

KFCは、2022年2月11日に無事25周年を迎えることができました!ただいま記念冊子を作成中です。

いつも支えてくださっているみなさま、誠にありがとうございます。今後ともスタッフ一同、共生社会実現に向け、尽力してまいりますので、引き続きどうぞ宜しくお願いいたします。